

「東京新聞」の「平和の俳句」から。今月は女優の水野真紀氏が選者に加わっている。

「読書とは平和を守る武器である 舟戸登恵子（59歳）」<水野真紀 流される心をせき止めるには知力、洞察力が必要。それを裏打ちするのが読書。先人の知恵を仰ぐ。子供にゲームより読書を！> 同感である。人間と社会を洞察する知性を持ちたい。「反知性主義」という言葉が流行っているが、洞察力と知性は読書によって養われる。「平和への一歩はきっと知ることだ 浜口円香（14歳）」<いとうせいこう 真理。知性を失い他者を無視すれば見境なく人は争う。> <水野真紀 無知は時として罪となる。十四歳の気付きへ期待大。> 歴史修正主義者たちは14歳の浜口君の句をしっかりと味わってほしい。過去を事実に基づいて正しく知ること、そして、現在を冷静に見て、明日の平和の確かな一歩となる。

「九条を守りしかどで縄打つか 多田治周（78歳）」<金子兜太 主権在民を宣言した憲法を尊重し「守」る。そのどこが悪い。> 人権と平和を守る人が捕らわれる時代にならないことを願う。沖縄のヘリパッド建設に反対する人々が公務執行妨害という名目で逮捕、起訴されている。その中に牧師もいる。社会的弱者を守ることを優先するのが権力者の義務ではないか。

「平和主義敵と共存する決意 渡辺拓海（21歳）」<金子兜太 この大学生の意思は深い。平和に敵は多いが敢（あ）えて共存の覚悟。> <いとうせいこう そうだ、平和主義は厳しく鍛えられた人間性によって成り立つ。> 最近の世相は、自分の正義を振りかざし、他の意見を聞かず、敵として悪口を並び立てる。違う意見であっても、互いに聞き合う寛容さが必要である。敵と思えても、共存する社会でのみ、平和を構築していくことができる。

「平和の俳句 戦後71年」から。「マラリアの父押し八歳の夏のふるえ 八幡禎司（65歳）」八幡氏の父親は海軍軍人で、柔道の有段者で、偉丈夫で、威厳に満ちていた。ところが、突然白目をむいてガタガタと震え始める。南方の戦線でマラリアに侵され、後遺症を負った。発作が起きると、あるだけの布団をかけ、母親は「おとうちゃん、しっかりして！」と耳元で呼び掛け、8歳年上の兄は、父親の体の上に乗る、歯を食いしばっていた。子どもだった八幡氏はただ恐ろしく、震えながら足元を抑えていたという。

「記者の『一句』」から。「シベリアで何があったか父の忌日 氏家孝（62歳）」極寒と飢えと強制労働の過酷な体験をした父親はシベリアについてほとんど語らず、黙したままだった。「元兵士無口語らず秘（ひそ）か生く 北村明延（90歳）」この兵士も戦争を語らず、密かに生きていた。兵士は90歳になられた北村氏ご自身のことであろうか。ビルマ戦線を生き抜いたある方は、戦争については一言も語らず、捕虜収容所での演芸会が楽しかったことしか言わなかった。戦争は心と体に深い後遺症を残す。

戦時中、社会を批判する若手俳人たちが弾圧を受けた。金子兜太氏は在学中に、句会の先輩が特高に尋問を受け、句会に来なくなって心配していたら、話しておきたいことがあると呼び出された。「つめが全部はがされた左手を見せて、おまえも言動には気を付けろ、と。青ざめた表情を、今でもはっきり覚えている」と書いている。弾圧された俳人たちの句を、フランスの俳人マブソン・ローラン氏が『日本レジスタント俳句集』にまとめた。その一部が「東京新聞」に掲載されていた。「英霊をかざりぺたんと座る寡婦 細谷源二」英霊になった夫や息子を持つ女性たちは「靖国の母」と言われて称賛されたが、実態は写真を飾り、その前でぺたんと座り込んで泣いていたのである。「戦争が廊下の奥に立ってゐた 渡辺白泉」家の中に忍び寄る寒々とした戦時色におびえる、慄然とする句である。